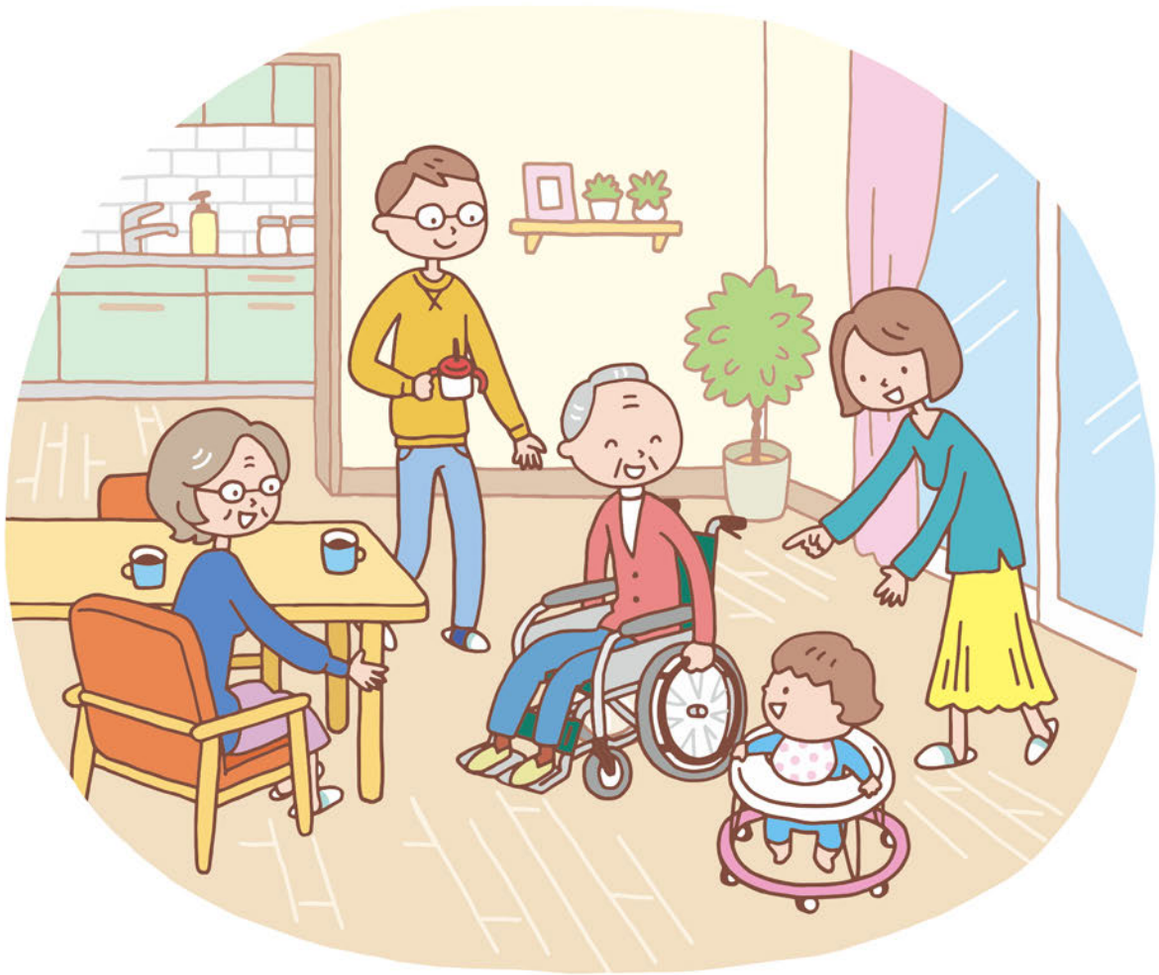
第32回

2022 福祉住宅建築助成実例集

ふれあい



バリアフリー住宅施工例

公益財団法人

ノーマライゼーション住宅財団

私たちの「願い」

公益財団法人として

私たちは、公益に資する法人として、
「高齢者も障がいのある人も社会で共に暮らし、共に生きることがノーマルである」というノーマライゼーションの理念に基づき
高齢者や障がい者が安全で安心して快適に暮らせる住生活の整備、向上を通してすべての人が生きがいをもって生活できる社会づくりと、社会福祉の増進に寄与することを目的に、すべての事業に取り組んでおります。

私たちのこの「願い」のため
尚一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう
心からお願い申し上げます。

自立に向けた住環境の整備を

公益財団法人 ノーマライゼーション住宅財団
土屋 公三

世界に類をみない超高齢社会に足を踏み入れたわが国では、高齢者が生きがいをもって快適に暮らすことのできる社会づくりが急務です。それにはまず生活の基礎となる住環境の整備が重要と考えます。そして障がい者が地域で暮らし、自立した生活を送ることができる環境作りは、誰もが願う共通の課題です。

平成元年に設立した当財団は、ノーマライゼーションの理念のもとに、建築、福祉、医療、保健など様々な分野の協力をいただきながら、福祉住宅の研究と普及に力を注いでまいりました。

成果は、設立以来続けております「福祉住宅建築助成事業」にみることができます。その対象住宅を紹介するこの実例集「ふれあい」の発行も、おかげさまで32回目となりました。

今回はコロナ禍のためにできなかった取材を２年ぶりに実施し、各地から多数のご応募をいただいた最新のバリアフリー実例を紹介しています。それらを見ると、年ごとに福祉住宅の水準が向上していることが感じられます。

近い未来には、誰もが安心して暮らせる福祉住宅が一般住宅として普及することを願いつつ、発刊にあたり取材にご協力くださいました建築主の皆様、及び選考にご協力くださいました審査委員の皆様に、心からお礼申し上げます。

ふれあい

～表紙イラスト～
中井 亜佐子さん

札幌市在住のイラストレーター。
北海道造形デザイン専門学校グラフィックデザイン科出身。
北海道イラストレーターズクラブアルファ会員。

目　次

自立に向けた住環境の整備を
（公財）ノーマライゼーション住宅財団　理事長　土屋　公三

四次元的発想を取り込み
バリアフリーはより進化 …… 4

新築タイプ

事例見学とプロの技術で
理想の住まいを追及
北海道登別市　T様邸 …… 6

障がいのある二女と共に
家族みんなが憩える住まい
千葉県鎌ケ谷市　Y様邸 …… 8

母の自立心を尊重しながら
家族の将来も見据えた家
北海道岩見沢市　S様邸 …… 10

子どもの身体状況の
変化に備えた最小限の配慮
北海道当別町　N様邸 …… 12

第32回の審査委員（敬称略・順不同）

審査委員長

北海道科学大学 名誉教授　菊地　弘明

審査委員

北海道デザイン協議会 名誉会長	大阪　克彦	北海道社会福祉協議会 事務局次長	庄田　香織
㈱住宅産業新聞社 代表取締役	小西　征夫	札幌市社会福祉協議会 常務理事	菱谷　雅之
㈱北海道住宅新聞社 代表取締役	白井　康永	北海道新聞社編集局生活部編集委員	塚崎　英輝
㈲環工房　代表取締役	牧野　准子		

新築タイプ

住む人、集う人を笑顔にする
身体も心も暖まる住まい
秋田県秋田市　F様邸　14

長男の身体機能に対応し
家族にとっても楽しい家
大阪府田尻町　N様邸　16

母の介護と夫婦の現在
将来も見据えた理想の家
北海道赤平市　K様邸　18

MSの不便から脱却し
いきいき暮らせる家を実現
北海道札幌市　Y様邸　20

障がいのある仲間と創った小さな靴の店
革靴をはいた猫　22

子どもたちが笑って暮らせる
国を残してあげたい
一般社団法人 Homie子ども未来育成会 特別顧問
NPO法人Good Family 主宰
井上 ケイ　26

四次元的発想を取り込み バリアフリーはより進化

今回は令和3年度の福祉住宅助成金事業にご応募いただいた福祉住宅のうち新築8例を紹介させていただいております。いずれも〝時間経過〟を強く意識した先端実例といえるものばかり。これからのバリアフリーのテーマを明確にした実例が揃いました。

当財団で実施した令和3年度の福祉住宅建築主助成事業では、新築の実例に高評価が集中しました。そのなかで特に優れた物件を審査の上ピックアップした結果、今号の「ふれあい」でご紹介するのは新築のみ8つの実例と、前例の無い内容となっています。当初はリフォーム実例の紹介をしなくていいものかと内部でも検討しましたが、新築ばかりを集中的に取材できたからこそ、新たなバリアフリーの課題が見えてきました。〝変化への対応〟です。

バリアフリーの新たなステージ

コロナ禍でできなかった取材を2年ぶりに実施し、久しぶりに北海道を中心に全国の優れたバリアフリーの家づくりをじっくり見させていただくことができました。

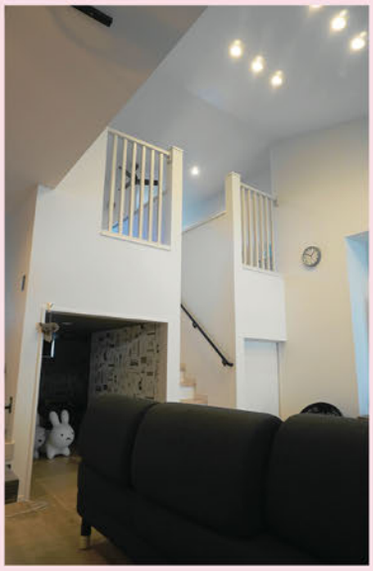
今回取材した8つの実例のうち、なんらかの障がいがある家族がいる実例は6つ、高齢の家族がいる実例は2つです。さらに細かく見ると、障がいのある家族のうち4つが、小学生以下のお子さんに障がいがある実例。そして高齢の家族の2実例のうち1つだけが、高齢の家族に身体機能の低下や認知症の症状が表れていました。

これまで30号以上発行してきた「ふれあい」では、障がいや高齢の家族が安全・快適に暮らせるというメインテーマのもとに行われた新築・リフォームの実例紹介がほとんどを占めていました。そして近年は障がいのある家族がいなくても、先々を考えてバリアフリーにしたという実例が増加傾向にあります。今回の号で紹介する実例のすべてに共通していたのは、〝先々の家族みんなの変化にも対応できる家づくり〟という明確なテーマがあったことです。

家族全員の〝これから〟を熟慮

障がいや難病のある家族の体力や身体機能の変化に対して、どのように対応するのか。幼少の家族に障がいがある場合は、成長

するにしたがって身体も大きくなります。あるいは今は元気で、障がいがありながらも不便なく生活できる家づくりをしても、先々体力が落ちたときは対応できるのか。高齢の家族の介護が終わった後、今度は自分たちが介護を受ける側になったときを想定して備えるべきことは……。多くの人にとって我家を得るチャンスは、そう何度もあるわけではありません。家族が長く住んでいける家づくりを考えた場合、あらゆる変化に対応できるようにしておくことは重要な課題といえるでしょう。



そして障がいや高齢の家族以外の人たちにとっても、家は快適な場所でなければいけません。これまで「ふれあい」では〝目的に応じたバリアフリー〟を提唱してきました。自立生活と介護、どちらを優先するのか、住む家族のうち誰のためのバリアフリーなのかを明確にして家づくりを進めるべきと主張してきましたが、家族全員が快適に過ごせる空間づくりこそ家づくりの基本。例えば高齢の家族の介護を優先した家づくりをしても、機能性ばかりを追求して病院や施設のようになっては、他の家族にとって憩える場にはなりません。障がいのある家族、無い家族、子ども、おじいちゃん、おばあちゃんまで、誰にとっても家は人生の拠点。その全員が快適に過ごせる家づくりというのは難しいですが、今回の実例はどれも、その困難な課題に対して果敢に挑んでいるものばかりです。

家族みんなの安らぎと変化、そしてその先を長く見据えた四次元的発想で。それこそ、まさに今後の家づくりの進化のキーワードであると確信しました。

特集ページもぜひご注目を！

そして特集ページでは、障がい者と共に奮闘する京都の靴修理のお店「革靴をはいた猫」、そして、あの井上ケイ氏の活動を紹介しています。

「革靴をはいた猫」は、創立から障がい者が参加し、重要ポストを担って働く企業。共に若い仲間、周囲と協力しながら〝本当のインクルージョン〟を実現。その取り組みには驚くことばかりです。

井上ケイ氏はアメリカの刑務所に10年以上服役。出所後は一転して児童虐待や子どもの非行、貧困家庭やいじめなどに苦しむ人たちへの相談者として活動を始め、20余年に渡って続けています。その異色の歩みがたびたびメディアでも取り上げられているため、ご存じの方も多いかもしれません。超多忙ななかにもかかわらず、この度当財団の取材に快く応じていただくことができました。実例の取材に応じていただいた8家族の皆様と併せて、心より御礼申し上げます。

新築部門

事例見学とプロの技術で理想の住まいを追及

体調が悪いときＴさんが来客中などでも横になれるよう、ベッドのスペースはカーテンで遮れるように。ダブルサイズの介護用ベッドは高額でしたが、ずっと使用するものなので購入しました。小上がりでご夫婦や仲間と食事を楽しむテーブルは既製品。どこに費用をかける・かけないをしっかり見極めています。

節約すべき箇所を見極め理想の完成

仕事中の事故で胸椎を損傷し、両下肢麻痺の障がいが残ったＴさん。段差がない少しの距離なら手すりや杖を使って移動することはできますが、移動には主に車いすを使用します。もともと住んでいた家は造りが古く、Ｔさんにとっての不便が多々ありました。これから1日の大半を過ごす空間となる家です。安心快適に過ごせるようにと、このほど建替えに踏み切りました。

当初相談していた施工会社は親身になって対応してくれたものの、要望とは異なるプランを提示してくることが多く、予算も上回る見通しになったため、結局発注を断念せざるを得ませんでした。

Ｔさんは施工会社との一連のやり取りを、古い友人の大工さんに相談していました。はじめはその友人に家づくりを依頼する予定でしたが「親しい間ゆえ、互いの率直な意見が言いにくいから」と断られていたそうです。ところが、その経緯を知った友人が改めて建替えを引き受けました。

プロだからこそできる技術やアイディアでＴさんの要望を詳細まで実現し、満足のいく完成になりました。もともとバリアフリーの知識はほぼ無かったというＴさんは、建替えにあたり4～5件の実例を見学したことが大いに役立ちました。そこで得たノウハウを、ご自身の障がいに合った家づくりに応用したことが成功のカギです。

北海道登別市　Ｔ様邸

～家族構成～

２人　夫妻

～年　齢～

共に 50 代前半

～ご家族の身体状況～

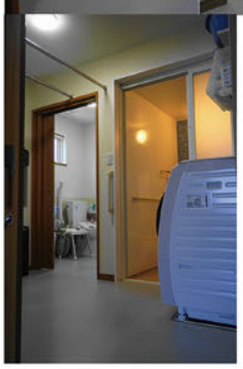
夫に脊髄損傷による両下肢麻痺

～新築にあたっての要望～

- 車いすでも不自由なく生活できる
- 障がいのある知人も集まりやすい
- 不必要な要素を無くし、可能な限り予算を抑える

～ゆとりの水回り～

広々とした脱衣室には２方向から出入り可能。トイレも浴室も引戸です。トイレはＴさんが長時間入ることもあるためテレビも設置しました。跳ね上げ式の手すりは低価格とのこと。



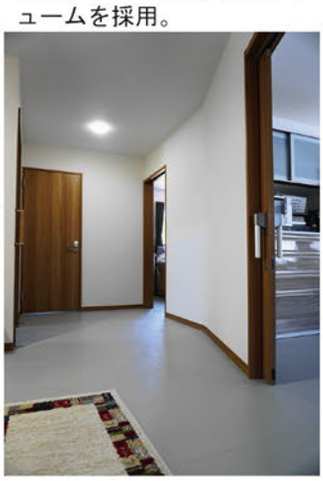
施主のＴ様は「バリアフリーの参考として見学をご希望の方は、ぜひご相談ください」とおっしゃっています。ご希望の方は当財団までお問い合わせください。

～大きく軽い引戸～

リビングとホールを仕切る引戸は大型で軽量のタイプに。車いすでの出入りもらくらくです。

～ホールの工夫～

玄関で車いすを乗り換えてからの動きが楽なように、ホールの一部を広くしています。屋内の床は車いすからのダメージを防ぐロンリュームを採用。



～費用を抑える工夫～

既成の洗面台も排水管が奥にあるタイプなら、少しの工夫で車いすでも使用可能。キッチンは不必要な上部の棚を設置しませんでした。

～駐車スペース～

風雨に当たらないようフードを設置。ご夫婦や仲間とアウトドアに出かけるのが趣味のＴさんにとって、障がいがあっても乗れるキャンピングカーは大切です。重みでタイヤの下が沈まないようコンクリートを打設。仲間の大工さんが「プロに頼むと高い」と、技術料なしで施工してくれました。

DATE

構　造	木造在来工法
延床面積	106.19㎡（32.12坪）
１階床面積	101.23㎡（30.62坪）
ロフト床面積	4.96㎡（1.42坪）

設計・施工

㈱下川工務店

登別市

※個人宅が事業所のため住所詳細、電話番号は非公開とさせていただきます。問い合わせをご希望の方は当財団まで

新築部門

障がいのある二女と共に家族みんなが憩える住まい

二女のWちゃんに障がいがあるため、どうしても両親がいっしょにいる時間が多くなってしまうことを考慮し、そのぶん長女のＩちゃんが楽しくのびのび過ごせることにも気を配りました。ロフトは主に長女のＩちゃんが使用するスペースに。抜群の機能性プラス家族みんなが楽しい空間を創りました。

介護経験と実例見学からアイディアを

Ｙさんの二女・Wちゃんは生まれつき脳性麻痺で、上下肢と体幹の機能障がい、知的に遅滞が見られます。Wちゃんが2歳になるころ、Ｙさんご夫妻は新築を計画。Wちゃんの介護への負担を最小限にし、地理的にも病院や施設、そして困ったときに頼れる実家などへスムーズに行くことができ、かつご主人や奥様の通勤にも大きな支障が出ない場所を検討し、現在の場所に決めました。

Wちゃんが生まれるまで障がいについての知識は皆無に近かったというＹさんご夫妻ですが、介護のしやすさを考えると平屋がいいに違いないと判断し、分譲地の2区画分を購入しました。バリアフリーに関する知識はWちゃんがリハビリを受けていた理学療法士にアドバイスを受け、さらに理学療法士は「実例を見たほうがいい」と、Ｙさんと同じケースで家づくりした人まで紹介してくれました。その手助けは新築する上で非常に役立ったそうです。

バリアフリーの機能性を高めることと同様に、〝家族みんなが楽しく生活できる住環境〟も大事なテーマでした。要介護者がいるからといって、楽しむことをあきらめたくない。そのテーマどおり、家族はもちろん友人や親戚が集まって、思い切り楽しめる空間づくりを実現しています。周囲の人々の協力も受けながら、理想の住まいが完成しました。

千葉県鎌ケ谷市　Ｙ様邸

～家族構成～

４人　夫妻＋姉妹

～年　齢～

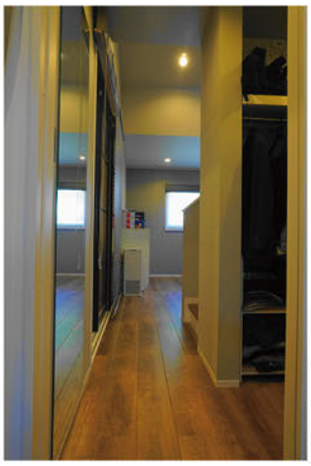
夫妻：共に30代後半
長女：５歳
二女：３歳

～ご家族の身体状況～

二女に脳性麻痺による上下肢、体幹の機能障害

～新築にあたっての要望～

- 二女への介護、そして先々の自立生活に柔軟に対応できる
- 長女や夫妻も家族みんなが暮らしを楽しめる

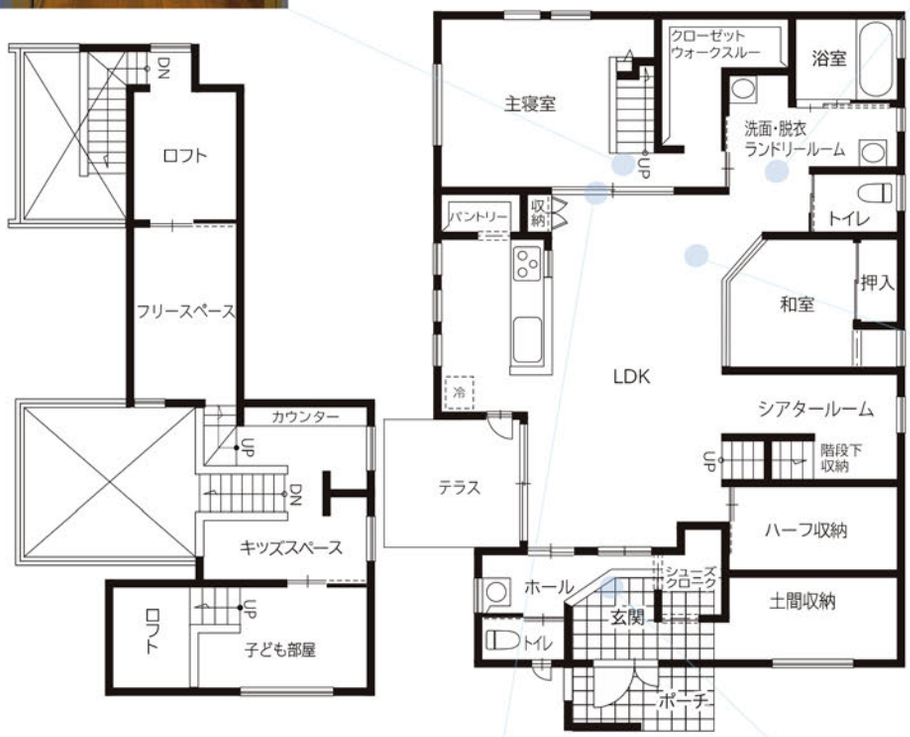


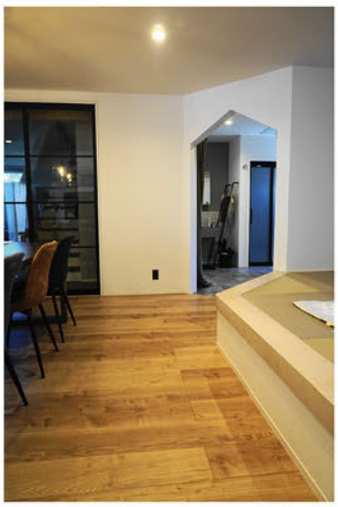
～回遊動線を確保～

介護のしやすさを考慮して、回遊動線は必ず確保したいと考えていました。寝室を通り抜ける独特な通路を設けて実現しています。

～余裕のユーティリティ～

トイレ、浴室、洗濯室をまとめるだけでなく、介護のしやすさも考えてスペースもゆったりと。





～水回りへのアプローチ～

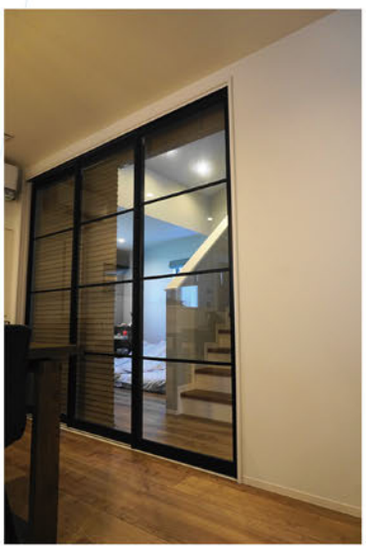
ユーティリティの入口は引戸を予定していましたが構造上難しかったため、リビングに対して斜めに出入口を施工。普段はカーテンで仕切っています。

DATE

構　造　木造在来工法
延床面積　119.03㎡（36.01 坪）
1 階床面積　119.03㎡（36.01 坪）

設計
㈱狩野建築設計事務所
さいたま市中央区上落合 6-12-7
☎048-708-1168

施工
㈱アイ工務店　柏支店
柏市新十余二 15-2
☎04-7193-8315



～上がり框を斜めに～

車いすを回転させやすいよう、ホールのスペースを一部狭くして土間の広さを確保しました。

～寝室を見通せる引戸～

Wちゃんを1人で寝かせておいてもリビングから様子がうかがえつつ、静かに過ごせるよう見通しのできる引戸を入れました。

新築部門

母の自立心を尊重しながら 家族の将来も見据えた家

可能な限り間仕切りを排除して車いすでの移動に配慮。開放感も増します。もちろん段差はありません。中学生の長男は生き物が大好き。リビングのあちこちに水槽が置かれ、見る人を楽しませてくれます。

介護と自立生活共に対応できる配慮

Sさんのお母さまは長年看護師として働いてきました。以前から股関節の調子が悪かったのですが、無理を押して仕事や家事を続けてきたため、腰にも負担が増加。そのうち動くことすらままならなくなり、手術による治療を試みました。

ところが術後、両下肢が麻痺してしまいます。日常生活で車いすが必要になりますが、暮らしていた家は段差があり、移動も不自由など、車いすで生活するには不便が多すぎました。そのため施設に入所して生活していたのですが、コロナが発生。自宅へ戻ることを余儀なくされました。

ちょうどその時期に、転勤で別の街に赴任していたSさんが戻ってくることが決まります。そのタイミングに合わせ、既存の家をお母さまが不自由なく生活できるように建替えることにしました。

お母さまはとても自立心が強く、自分でできることは自分で行える家づくりを希望。ただ日によって体調の変化が大きく、介護が必要な時もあります。そうした事情も踏まえつつ、先々はお父さま、そして遠い未来はSさんも介護が必要になるかもしれない、ということも想定し「どのような状況にも柔軟に対応できる家づくり」をテーマにしました。そしてSさんには息子さんもいます。介護のしやすさだけでなく、三世代が楽しく快適な生活を楽しめるという点も重要視しました。

北海道岩見沢市 S様邸

～家族構成～

4人　両親＋長女＋孫

～年　齢～

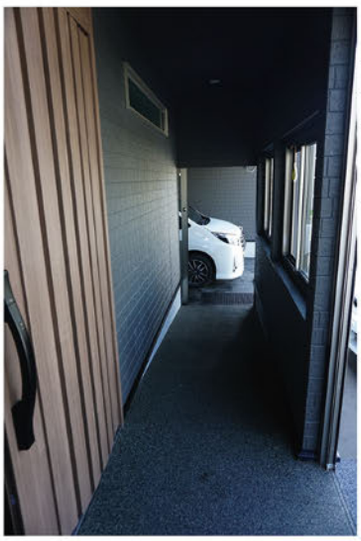
両親：共に60代前半
長女：30代後半
孫　：10代前半

～ご家族の身体状況～

母に両下肢麻痺の障がい。歩行はできない。杖や手すりを使い立位のみ

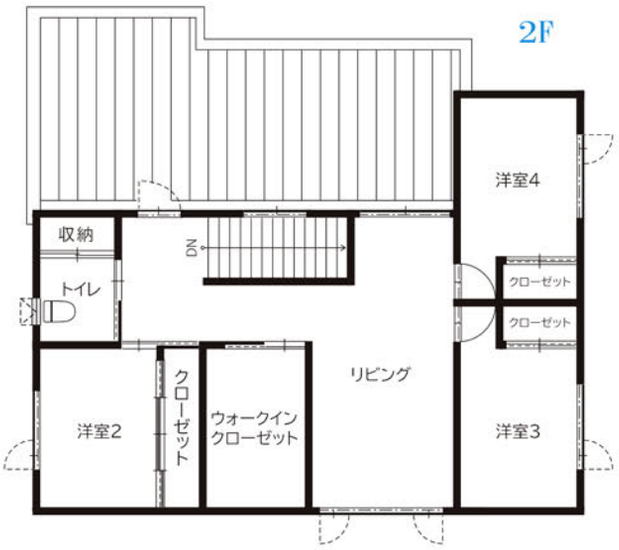
～新築にあたっての要望～

- 母が極力自立生活できるように
- 介護もしやすくして家族の将来にも配慮



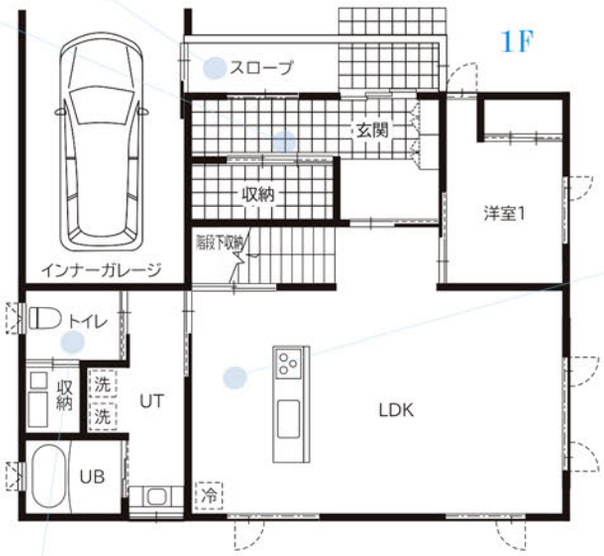
～外玄関のスロープ～

玄関を出たら風雨に当たらずインナーガレージへと移動できるスロープを設置。角度も緩やかです。以前は基礎高で、階段で玄関にアプローチしていましたが、半分以下の高さにしました。



～玄関の大きな収納～

広い玄関脇に車いすがそっくり入る収納を設けました。



～使いやすいキッチン～

料理が好きなお母さまが車いすのまま使えるタイプのキッチンを採用。動線もゆとりを持ちました。

～トイレの配慮～

車いすのまま、そして介護する人も入れる大きなトイレには大きな収納も完備。非常時の呼び出しスイッチも用意しました。

～細やかな工夫と役立つ機器～

遠隔で施錠・開錠できる玄関ドア、座ったままファンを回せるリモコン、車いすでも立ったままでも使いやすい高さにしたスイッチ類…身体の機能が低下した後でも不便が無い様々な機器の導入や工夫をしました。

DATE

構　　造 木造在来工法
延床面積　204.54 ㎡ (61.87 坪)
1 階床面積 121.73 ㎡ (36.82 坪)
2 階床面積　82.81 ㎡ (25.05 坪)

設計・施工

㈱田端本堂カンパニー

三笠市岡山 359-1

☎01267-2-7300

新築部門

子どもの身体状況の変化に備えた最小限の配慮

必要に応じてあらゆる箇所に手すりが施工できるよう下地を入れていますが、現時点ではほとんど手すりがありません。Kちゃんが成長するに従い、必要に応じて施工していく予定です。

運動能力の向上を日々の世話から実感

Nさんの二女のKちゃんは生後間もなくウエスト症候群という難病が発症。そのため運動能力や精神に遅滞があり、歩行が困難なのでハイハイするように腕を使い移動しています。

Kちゃんの就学が近づき、Nさんご夫妻は新居の必要性を考えました。それまで生活していたマンションは新たに就学する支援学校、病院などとは遠距離。特に通学面を考えた場合、これから長年毎日通学するとなると、送迎の面などで負担が大きくなります。住んでいたマンションも狭く、Kちゃんが成長すると不便が多くなることは明らかでした。そこでKちゃんの就学に合わせ、学校や病院に通いやすい場所を選んで建築したのがこの新居です。

ウエスト症候群は発作が起きなければ身体機能低下が進行する心配はありませんが、移動には車いすが必要になることは間違いなさそうです。そのため新居は平屋がベストであると判断。割高になることは承知の上で、インターネットでできるだけ低額で建築を請け負ってもらえそうな施工会社を探し当てました。

Nさんの奥さまは介護しながら、Kちゃんの運動能力が日々高くなっていることを実感しています。そのため手すりの施工などは最小限にとどめました。Kちゃんの日常動作、必要な介護などに応じて最適な施工をしていく予定です。

北海道当別町　N様邸

～家族構成～

4人　夫妻＋姉妹

～年　齢～

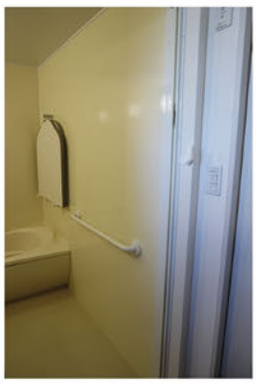
夫妻：夫40代後半・妻30代後半
姉妹：7歳・5歳

～ご家族の身体状況～

二女が運動機能と精神に遅滞。
歩行困難。

～新築にあたっての要望～

- 二女の障がいの進行に応じて介護をしやすく、そして二女ができることができる家
- 通勤通学その他利便性の良い環境



～浴室～

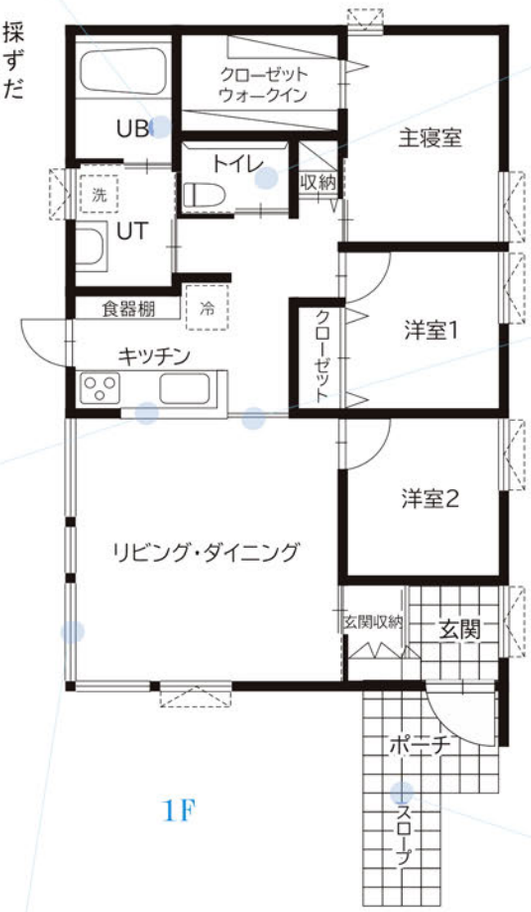
介護のしやすさを考えて1.25坪タイプを採用。バリアフリーにするなら、浴室に限らず引戸はマストです。手すりは必要な箇所にだけ取り付けました。

～トイレの位置～

当初は入って右側、写真の反対側に便器を設置する予定でした。しかし、少しでもドアに近い方がいいかと施工直前でプラン変更したところ、逆に介護しにくくなってしまったとか。反省点のひとつです。

～カウンターの安全対策～

Kちゃんがテーブルから伝ってカウンターを乗り越えることが無いようアクリル板を施工。透明なので圧迫感も無く安心です。



1F

～安全用ガード～

元気いっぱいのKちゃんがあちこち動くので、危険がある水回りのほうへ行かせないように開閉式のガードを施工。身体が傷つかない構造になっています。

DATE

構　造　木造在来工法
延床面積　82.64㎡(25.00坪)
1階床面積　82.64㎡(25.00坪)

～外玄関のスロープ～

宅地の端の敷地を購入し、隣接する農地の広々とした景観が屋内からでも一望できます。

～車の間近に伸びるスロープ～

駐車した車のすぐそばまでアプローチできる、緩やかなスロープを設置。広い敷地を有効に使いました。

設計・施工

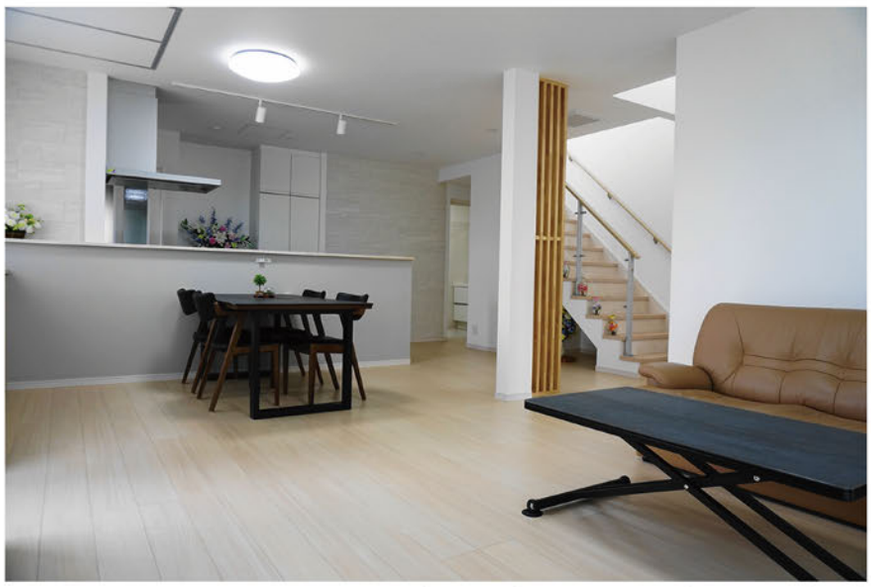
㈱藤城建設

札幌市東区中沼町33

☎011-791-1000

新築部門

住む人、集う人を笑顔にする 身体も心も暖まる住まい



必要以上に間仕切りを設けないことで広々と開放的なったのはもちろん、あらゆる箇所から箇所へ車いすでも最短距離で移動できます。お父様が施設から帰宅したり、子どもたちが家族と共に帰省する際は、写真右側のテーブルとダイニングテーブルを併せ、家族で団らんの時間を過ごします。

外断熱で家全体が暖かく夏も快適

Fさんがこの場所に暮らして、およそ40年。住み始めて間もなく話が進んでいた近隣の区画整理が数年前に実施されたことをきっかけに、住み慣れた家を建て替えることにしました。

新居を建てる上でのメインテーマは、先々まで安心安全快適に暮らせる家づくり。機能性だけでなく、90代の父が施設から定期的に帰宅、離れて暮らす子どもたちが家族を連れて帰省、そして古くから付き合いあるご近所さんが立ち寄ることまで視野に入れ、親しい人たちが集い、楽しい時間を過ごせる空間づくりを心掛けました。

バリアフリーのアイディアはFさんご夫妻がそれぞれのご両親を介護してきた経験をベースにしています。そしてFさんご夫妻が今後、介護したご両親と同じような身体状況にならないとは限りません。そうしたことも、しっかり考慮に入れた上で、広い視点を以て柔軟に対応できるようにした優れたアイディアが散見できます。広々とした空間にすることで自走、介護、どちらであっても車いすで移動しやすい動線を確保したほか、暖かさも重要視。スペースごとの気温差が生じない、全室を均等に暖める外断熱を採用するなど、目標通りに優れた機能性や快適性を実現しています。家族やコミュニティのつながりも大切にするFさんご夫妻の人となりそのままに、新居は明るい空間になりました。

秋田県秋田市　F 様邸

～家族構成～

３人　夫妻＋二女

～年　齢～

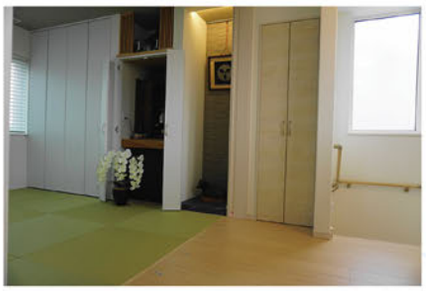
夫妻：夫 70 代前半・妻 60 代後半
二女：30 代前半

～ご家族の身体状況～

月２度程施設より帰宅する父 (90 代後半) は要介護３

～新築にあたっての要望～

- 父の介護をしやすく
- 夫妻の身体低下にも柔軟に対応
- 家族やご近所さんが楽しく過ごせる

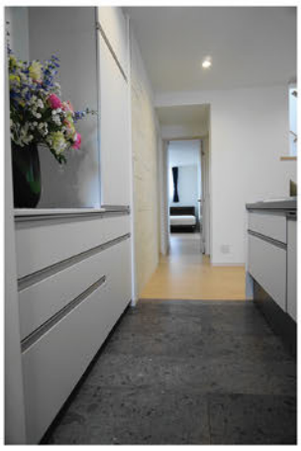


～開放的な２階の和室～

２階には仏間を兼ねたゆったりとした和室を設置。隣の洋室と共に広々とした客間としても機能します。

～ゆったり水回り～

水回りを大きな空間にまとめました。先々に身体機能の低下が起きても、これだけのスペースがあれば臨機応変に対応できます。



～寝室の気配を感じる～

キッチンにいながら寝室の気配を感じられる間取りに。先々の介護が必要になったときの見守りを考慮しました。

～玄関の吹き抜け～

屋内を均等に暖めるというのも今回のテーマ。玄関の吹き抜けは、効率的にその目的を果たす役割を果たしています。

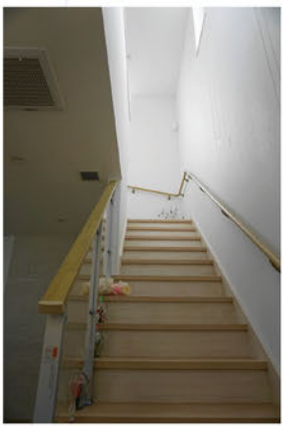
DATE

構　造	木造在来工法
延床面積	154.64㎡（46.69坪）
１階床面積	114.90㎡（34.69坪）
２階床面積	39.74㎡（12.02坪）

設計・施工
㈱土屋ホーム秋田支店

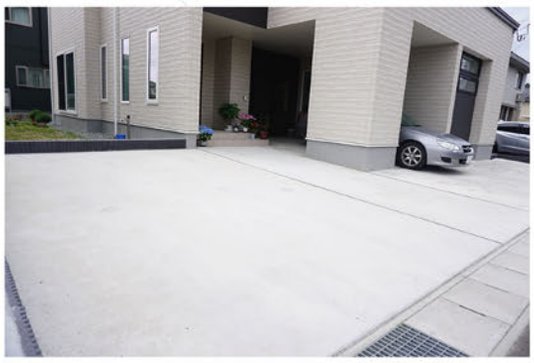
秋田市御所野地蔵田２-２-９

☎018-826-0511



～緩やかな階段～

安全に考慮して階段は踊り場を設け角度は緩やかに。足腰が弱らないようＦさんは毎日上り下りして仏壇に手を合わせることを日課にしています。



～玄関前を広々と～

施設の送迎車からの車いすの乗降を考慮して玄関前は広々と。すぐお隣の90代のおばあちゃんが立ち話を楽しむことまで考えて、階段に鉢植えを用意しています。コミュニティを大切にするＦさんご夫妻の暖かな心遣いです。

新築部門

長男の身体機能に対応し 家族にとっても楽しい家

ナチュラルな色合いで統一された室内はとても開放的で、建坪以上の広さを感じます。Hくんの身体状況が低下しても不便が無いよう、腰から下の低い部分は開放し、タンスや棚類は極力配置しないようにしました。暖房は床暖を採用し、カーペットを敷かなくても足元から暖かくなるようにしています。

成長に伴うあらゆる変化に対応したい

Nさんは5人家族。長男のHくんは2歳を目前にして、ミトコンドリア病のリー脳症を発症しました。症状によって運動機能、あるいは呼吸機能など、さまざまな機能障害が出てきます。

Hくんの場合は難病の進行に伴い、左上下肢の機能障害が顕著になり、また体幹も弱くなってきました。杖や手すりを使うと、なんとか立つことや、短い距離を歩くことができますが、病院では「車いすが必要になる可能性が高い」といわれています。

Nさん一家は以前、別の持家で暮らしていました。しかしHくんの成長は早く、以前の家では介護するためのスペースが確保しにくくなってきたそうです。またHくんがさらに成長していけばやりたいことも増え、車いすでも自由に生活できる空間が欲しくなるはず。そう考えた末、以前の家を売却し、バリアフリーの新居を建設することを決めました。

家族が障がい者や難病になった場合、専門家でない限り適切なバリアフリーを実現するのは非常に困難です。Nさんの場合はSNSを活用しました。すると同様の障がいがあるお子さんがいる家族とつながることができたのです、しかも相手は過去に当財団で取材させていただいた家の施主様で、動画を駆使して家づくりの要点を教えてくれたそうです。私たちにとっても大変感慨深い新居の完成となりました。

大阪府田尻町　N様邸

～家族構成～

5人　夫妻＋二女一男

～年　齢～

夫妻：共に40代前半
子ども：長女13歳・長男11歳
二女　5歳

～ご家族の身体状況～

長男がリー脳症による左上下肢の機能障害

～新築にあたっての要望～

- 長男の身体機能の変化に対応できる
- ユニバーサルデザインを念頭に、家族全員にとって快適な家づくり

～玄関～

土間を広くし、暖簾の後ろには車いすを収納できる大きな収納を設置。

～トイレ～

便器が現在のＨくんの身長には少々サイズが合わなかったので、台を用意して使いやすくしました。

～広い通路～

車いすの介護・自走、どちらでも通路を幅広くとるのは必須。10cm広いだけで使いやすさがぐんとアップするそうです。

～回遊動線～

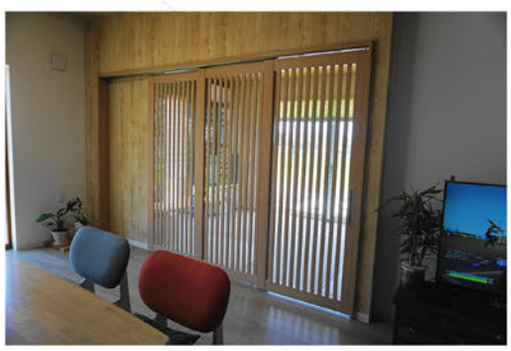
ぐるりとキッチンを通り抜ける、幅十分な回遊動線を確保。コーヒーが大好きなＨくんが自分で煎れることができるように配慮されています。

DATE

構　造	木造在来工法
延床面積	154.84㎡(46.84坪)
1階床面積	96.88㎡(29.31坪)
2階床面積	57.96㎡(17.53坪)

～玄関と駐車場を隣に～

車の乗降がしやすいよう駐車スペースは広々。そして玄関のすぐ脇なので出入りも楽です。雨をしのげるカーポートも設置しました。



～様子がわかる引戸～

Ｈ君の部屋の戸は格子状にして見守りができつつ、プライバシーにも配慮できるように。１階は、これ以外の扉もすべて上釣り式の引戸を採用しています。

設計

山下一級建築士事務所

大阪府岸和田市春木旭町36-35

☎072-441-1799

施工

非公開

母の介護と夫婦の現在 将来も見据えた理想の家

リビングとダイニングを斜めにずらした「雁行（がんこう）型」という配置・間取りにしたのは奥さまのアイディア。リビングは６畳のスペースしかありませんが、広々としたダイニングとの一体感で、とても開放的。それでいて、２人で過ごすのにはちょうどいい落ち着きをもたらす小さな空間の気配もあります。

経験を元に定説にとらわれない工夫

Kさんご夫妻とお義母さまは同じ地域内で別々に暮らし、頻繁に訪問しながら必要に応じて介護していました。お義母さまの家は昔ながらの造り。広いのですが段差が多く各スペースも小ぶり。狭い空間で介護していると身体をぶつけてしまうこともあり、お義母さまは身体のあちこちに青あざを作ることもあったそうです。

そのうちお義母さまに認知症の症状が出始めてきました。そのため同居しながら介護できる新たな家の必要性を感じたと同時に、ご夫妻にとっても、先々安心して生活していける家が必要と考え、住み慣れた地域での新居の建築を決めました。

大切な課題の1つは、お義母さまの介護のしやすさ。しかしその点だけにとらわれてしまうと、先々自分たちがお義母さまと異なる体力の低下が起きた場合、対応しにくくなりかねません。そこで各部を詳細まで吟味しながらプランを練っていきました。

今回は注文住宅として要望にぴったりの家づくりができました。ご自身の介護の経験、展示場などに足しげく通って行った情報収集を元に、ご夫婦が生み出したアイディアの数々は実にお見事。雁行の間取りなどもネットでの情報などを参考にしたのではなく、ご自分たちで独自に考えた末に採用しました。定説にとらわれることなく、自分たちの住みやすさ・快適さを追求した理想の家づくりの好例です。

北海道赤平市　K様邸

～家族構成～

４人　母＋夫妻＋長女

～年　齢～

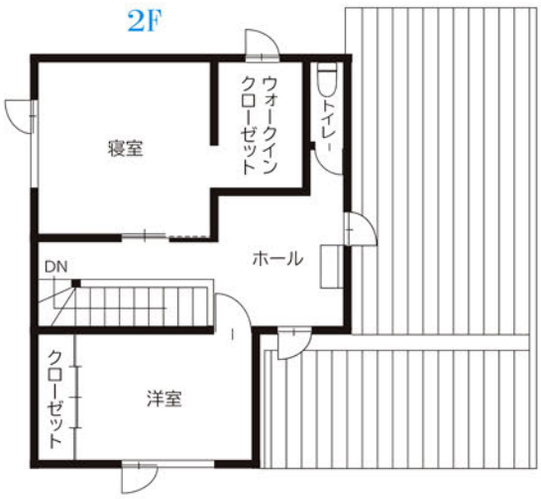
母：80代後半
夫妻：共に60代前半
長女：40代前半

～ご家族の身体状況～

母が要介護１の身体能力低下と認知症

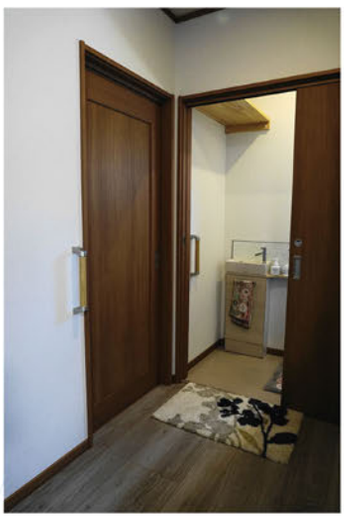
～新築にあたっての要望～

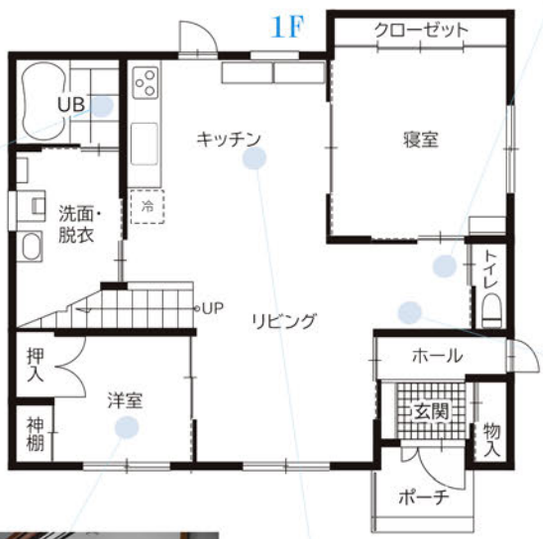
- 母の介護をしやすく
- 夫妻の身体低下にも柔軟に対応
- 介護に必要な設備は最小限度に

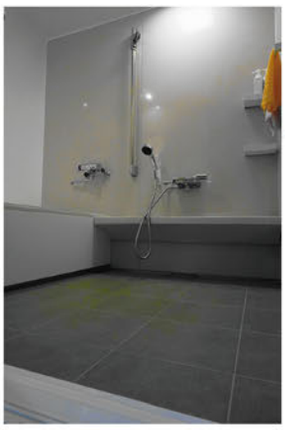


～トイレと寝室の動線～

お義母さまが最も長い時間を過ごす寝室とトイレの行き来が最短距離になる動線に気を配りました。







～1.25 坪の浴室～

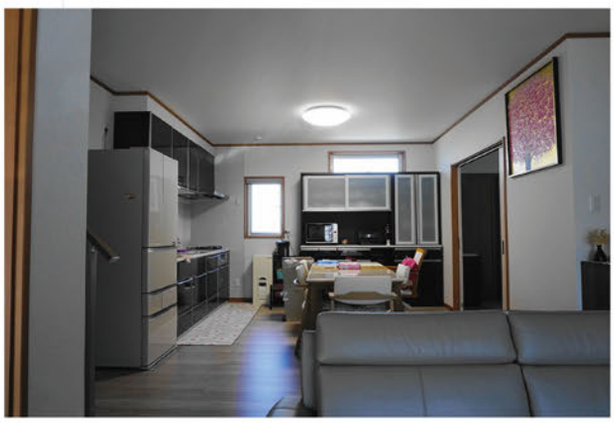
前の家では奥さまが浴槽に片足を入れながらでないと介護できなかった浴室。大きな浴室の採用で負担が大きく軽減です。

～巧みな空間の利用～

雁行型の間取りによってできたスペースに収納棚を配置。リビングがすっきりとした空間になっています。

～リビング脇の洋間～

雁行型の間取りを利用して小さな洋間を配置。日当たりがよく庭も見え、予想外に？活用されるスペースになっています。



～様子を感じられるダイニング～

作業しながらでも背後のお義母さまの気配を感じられるキッチン＆ダイニング。対面式などではなく使い慣れたタイプのキッチンを採用したので広々とした空間になっています。手すりを施工できる下地は入っていますが、お義母さまはテーブルやソファを伝え歩きするので施工しませんでした。

DATE

構　造	木造在来工法
延床面積	131.66 ㎡ (39.83 坪)
1 階床面積	84.46 ㎡ (25.55 坪)
2 階床面積	47.20 ㎡ (14.28 坪)

設計・施工
㈱和泉組

赤平市泉町２丁目 1-8

☎0125-32-2626

新築部門

MSの不便から脱却し いきいき暮らせる家を実現

Yさんのような障がいがあると、２階建ての家の１階だけで生活を完結できるようにしがちですが、両方フルに使えるようにしているのでこの実例です。そして家の中だけでなく外出のしやすさも重視。アグレッシブに行動できるための工夫が随所に見られます。

積極的に表に出かけるための配慮も

Yさんは仕事中の事故で頸椎を損傷し、四肢麻痺の重い障がいが残りました。

まだ若く、結婚間もない時期にそのような身体状況になり、当初は将来を絶望視していたYさん。しかしリハビリを続けるうち、Yさんと同じ障がいと付き合いながらアグレッシブに生きる多くの人たちと出会います。そうした仲間たちに大いに励まされ、Yさんも前向きになれたそうです。

退院してからYさんは奥様と生まれたばかりのお子さんの3人、賃貸マンションで生活していました。やはり車いすを使用していると入居できる物件は大きく制限され、やっと見つけたマンションは居室内は車いすでなんとか移動できましたが、トイレや浴室が狭く、Sさんが利用するには介助が必要でした。また共用部には各所に段差があり、立体型の駐車場はご自身で車のアップダウンの操作ができず、奥様の手を借りねばならないなど、さまざまな不便があったそうです。

またお子さんが成長して活発になるにつれ、騒音などに対する苦情などへの心配もありました。そうした数々の課題を解消し、家族全員がのびのびと、そしてSさんご自身も不便なく、いきいきと生活できる住まいを実現したのが今回の新築です。Yさんが自立生活できる環境にし、予算の関係で実現できなかった点は、今後のお楽しみに。満足度の高い完成となりました。

北海道札幌市　Y様邸

～家族構成～

３人　夫妻＋長男

～年　齢～

夫妻：共に30代後半
長男：３歳

～ご家族の身体状況～

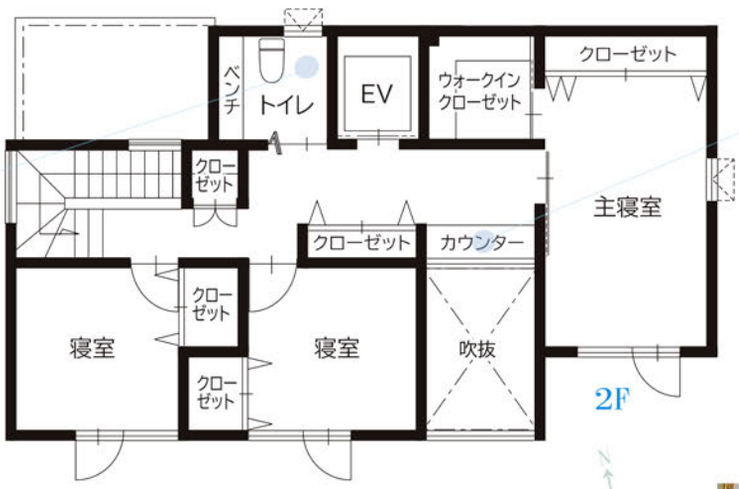
夫が頸椎損傷による全身麻痺。上肢は少しだけ動かせる。歩行はできない。

～新築にあたっての要望～

- 障がいのある夫が１・２階フルに使用し自立生活できる
- 季節問わず車への乗降がスムーズ

～トイレ～

身体機能に合わせて手すりではなくベンチを設置しました。

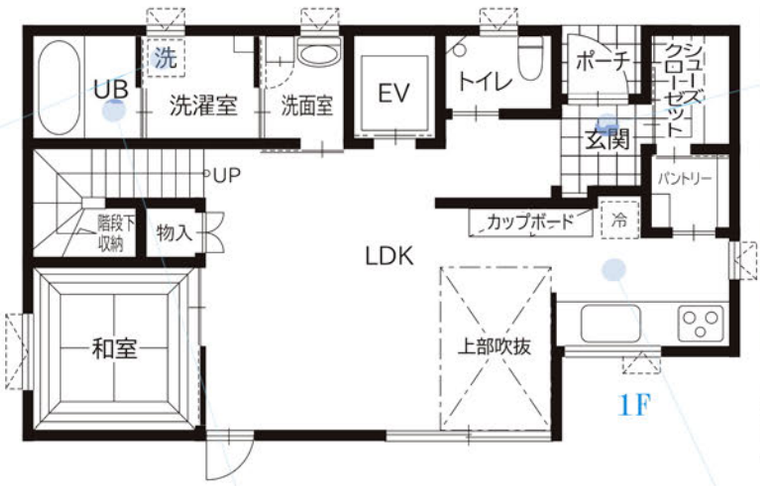


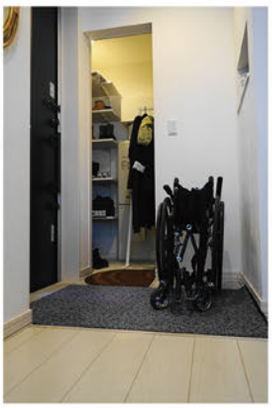
～カウンター～

２階の通路に多目的のカウンターを配置しました。

～バリアフリー洗面台～

高額なので身体機能によって評価が分かれるバリアフリータイプの洗面台ですが、Ｙさんには使いやすいそうです。





～玄関～

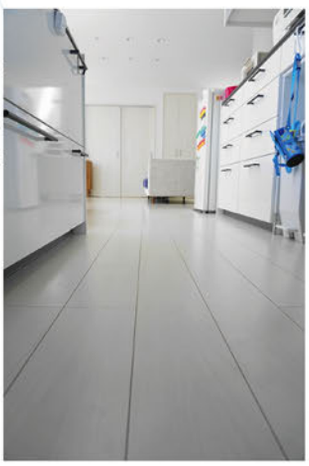
限られたスペースでも車いすの回転や外とのスムーズな出入りが可能。

～浴室～

移乗して浴槽にアプローチできるベンチがあるのでＹさん単独での入浴が可能です。

～キッチン動線～

奥さまの手伝いもできるよう車いすでも移動しやすいようキッチンの動線も重視。広く取ってあります。



DATE

構　造	木造在来工法
延床面積	119.35㎡(36.10坪)
１階床面積	64.28㎡(19.44坪)
２階床面積	55.07㎡(16.66坪)

設計・施工

㈱AD設計室

札幌市西区二十四軒１条４丁目2-35

☎011-688-7671

～駐車場～

玄関ドアを出るとすぐに車に乗り込めます。マンションに住んでいた頃の悩みが解決しました。

京都の人たちから〝かわねこ〟の愛称で親しまれる靴の店「革靴をはいた猫」。この店でいきいきと働く障がい者の従業員には創業からのメンバーも。障がいのある人・ない人が不可欠な存在として助け合い、奮闘する、この小さな企業創立のきっかけとなったのは、あるカフェのパートの店長さんでした。

障がいのある仲間と創った小さな靴の店

革靴をはいた猫

お客様の幸せづくりに勤めます

働く仲間の幸せづくりに努めます

自らの幸せづくりに励みます

学生の心を揺さぶった大学カフェのパート店長

100年越えの老舗ひしめく京都で2017年に創業したばかりの「革靴をはいた猫」。靴のみがきやリペア、再生販売を行うのは従業員員4名の小さな靴店です。2軒の店舗を構え、出張でのサービスも展開。従業員には知的障害や発達障害のメンバーがいて、彼らが重要なポストに立って店を支えているのが大きな特徴です。

代表の魚見航大さんは京都龍谷大学の出身。学生時代に仲間たちと共に革靴をはいた猫を創業しました。学生時代に福祉を専攻していたわけではありません。起業家を目指していたわけでもありません。政策学部に学び、卒業後は地元に帰って公務員になる予定でした。そんな魚見さんを、ご自身がまるで予想していなかった現在に導いたのは、大学内のカフェでした。カフェ「樹林」は大学と社会福祉法人が共同して立ち上げたB型就労施設。従業員の障がい者と学生が交流することで相互理解を深めることを目的にオープンしました。

面白い取り組みをしている、という程度の興味しかなかったという魚見さんですが、友人から気になる話を耳にします。「客足が伸びず、閉店してしまうかもしれない。店を改善する手伝いをしてほしい」と、店長が学生に呼びかけているというのです。ならば自分にできる範囲で、なにか手伝ってみようか。そう考えた魚見さんたちは店に行ってみました。

店長は50代ぐらいの女性で福祉関係者ではありません。待遇はパート。ただ「樹林の現状を改善したい」という一心で孤軍奮闘していました。「我々以外にも学生が集まってきたのですが、みんなが店長さんの頑張る姿に心を動かされました」と魚見さんは振り返ります。

店長の熱意に感銘を受けた学生たちは仲間に声をかけ、次々に人が集まってきました。そして頻繁にミーティングを開いては改善策、集客のためのアイディアや企画を持ち寄ります。その場には従業員の障がい者たちも参加。メンバーみんなが「樹林をなんとかしたい」という共通意識を持ち、分け隔てない意見交換を繰り返しました。いつしか彼らは「チーム・ノーマライゼーション」と呼ばれることに。

「従業員の皆さんは、ぼくらとほぼ同い年。『将来の道がある学生と、障がいのある自分たちとは立場が違う』という思いもあったようですが、ミーティングを繰り返すうちに姿勢が変化していきました」。

最終的にメンバーは約40人にまで膨れ上がっていました。

（上）仲間と共に「革靴をはいた猫」を創業した代表の魚見航大さん。（下）店頭には傷んだ靴をどの程度までリペアできるかが一目でわかるティスプレイがある。

大丸京都店の店舗の様子。常連客がちらほらと立ち寄っていました。丸山店長が靴のことを詳しく丁寧に教えてくれます。

日々の活動にあけくれ　就活やってる時間はナシ

障がい者のメンバーは「自分もチームの一員」という自覚が芽生えると、それぞれが力を発揮し、結果としてそれが樹林の集客に繋がっていきました。チーム・ノーマライゼーションのメンバーが障がいの有無に関係なく、それぞれの立場で「現状を改善しなければ」という一心で頑張った結果です。それはメンバーにとって、大きな手ごたえになりました。樹林でのケースと同じように、障がい者の持つ可能性を引き出し、社会で活躍する存在にできないだろうか。いつしか目標は大きくなり、チームは障がい者と学生が助け合いながら互いに学ぶ学校さながらに。メンバーは毎日集まって座学やミーティングにあけくれました。

店長は、障がいのある人でも力を発揮できそうな職種をしぼり、その中で活躍できるにはどうすべきか考えようと提案します。「靴みがき」はそのうちのひとつで、魚見さんがリーダーに任命されます。「靴みがきなんて、やったことがありませんでした」と魚見さん。「ちょうど自分やメンバーは就活の時期でしたが、こっちの活動のほうに必死でした。メンバーも『就活どころではない』という雰囲気で、ぼくは就活に行く友達の靴をみがいて勉強しました」と笑います。

支援学校の教員もびっくり　障がい者従業員の成長

魚見さんは大学院に進んでその活動を続けることも考えましたが、仲間と共に起業することを決意しました。それから5年が経ち、メンバーそれぞれが懸命の努力を続けています。

立ち上げ当初はメディアで報じられ、共感して協力してくれる地元の金融機関などの応援もあり、苦労しつつも順調でした。しかし魚見さんは「顧客をつかんでいく大切さに気付いていなかったんです」と反省しています。「店舗を構えさせていただいた大丸京都店さんには、同じお客さんが何度も来ていることに気が付いたんです。経営者として恥ずかしいことですが、そこから顧客獲得のためにすべきことを学び始めました」と魚見さん。その結果ここ1年ほどで、ようやくでリピーターが増えてきたことを実感できるようになりました。

創業当時からのメンバーの1人・藤井琢裕さんは、以前はお金を計算することができませんでした。そのため出張するにも切符が買えず、駅まで誰かが同行する必要がありました。しかし「自分でお客様に対応したい」と、スタッフの

サポートを受けながら勉強を重ね、単独の移動やレジの精算までできるようになっています。革靴をはいた猫は新たに大手商社の阪和興業と業務提供し、大阪に進出します。藤井さんはそのリーダーとして派遣されることに決定。大役を担うことになりました。

従業員の丸山恭平さんは発達障害ですが、丁寧な接客には定評があります。靴の知識も豊富。大丸京都店の店長という大役を担っています。革靴をはいた猫では障がいの有無に関係なく、それぞれの従業員に大事な役割が任され、助け合いながら持ち場を守っています。

魚見さんは「樹林でのスタートから〝福祉的〟な意識はありませんでした」といいます。「最初は『助けてあげなきゃ』とう意識がありましたが、すぐに間違いだと気づいたんです。それよりも障がいのある人たちは『フラット』な関係性を求めています。そして自分からなにかに興味を持つと一生懸命に取り組みますし、その姿勢にぼくたちも助けられています。藤井さん、丸山さん、彼らがいなかったら、この会社も無いというほど貴重な存在です」。

発信していきたいのは「人がこんなに変わる」こと

これからの展望を聞くと「地域の人たちに支えられているこの小さな会社を、とにかく継続していくことです」と丸山さんは言い切りました。必要以上に大きくすることは、考えていません。「靴の修理や廃棄された靴の再生を通じて物を大切にする文化の拡大、環境に貢献するということを柱に、我々が理想とする事業を成熟させたいんです。大きくしていくのは立派に成熟した後です」。そして障がい者の雇用については「新しいメンバーが必要なときは、もちろん障がい者も受け入れさせていただきます。しかし障がい者だけを積極的に雇用する、ということとは違います。どんな若者にも可能性があり、周囲からダメだと思われていた人が、こんなに変わって活躍できるという姿を発信していきたいですね」。

福祉の知識が無い人たちが、無意識のままに生み出したノーマライゼーションの世界は、私たちが学ぶべき理想の福祉社会の姿を現実化しています。北海道から遠く離れた場所で創業した小さな靴の店が、これからどんなことを日本中に発信していくのか。楽しみでなりません。

丸山店長がちょうど磨き上げたばかりの靴がこちら。新品のようですね、と言うと「残念ながら新品とまったく同じ状態までにはできないんです」と丸山店長は謙遜しますが、素人目にはまったく違いがわかりません。ウイスキーを使用するのが秘訣だとか。

子どもたちが笑って暮らせる国を残してあげたい

NPO法人Good Family　主宰
一般社団法人　Homie子ども未来育成会　特別顧問

井上 ケイ

出身は闇社会。アメリカでの服役後は一転、虐待やいじめ、貧困の中であえぐ子どもをはじめ、悩める人たちへの支援活動一筋。偏見や誹謗中傷にも一切反論せず、ひたすら苦しむ人々を助けるためにまい進している井上ケイ氏に、その活動についてお聞きしました。

問題を抱えていても相談できない人たちや家庭

警察庁の発表によると、2021年に児童虐待(18歳未満)の疑いで児童相談所に通告された件数は全国で10万8千50件。通告の内容には、子どもの目前で家族に暴力が振るわれるDV、子どもの身体に危害が加えられる身体的虐待や性的虐待、暴言を浴びせるなどの心理的虐待、育児放棄などがあります。

井上ケイさんは、神奈川を拠点にしながら、これまで20年に渡って虐待や育児放棄を中心に、子どもの非行、いじめ(子どもに限らず大人のいじめも含む)など、さまざまな問題を抱える人たちの相談に乗りながら、問題解決の手伝いに取り組んでいます。

その活動の詳細を聞きたいと、当財団ではケイさんが主宰する、NPO法人「Good Family(グッドファミリー)」の相談フォームを通じて取材依頼をしました。「ご返答が遅くなり大変申し訳ございません」と丁寧なご返答をいただいたのは、それから2日後。実に数万件の相談メールが返答待ちという状況のため、私たちの送ったメールを見るのが遅れたというのです。「数万件」という表現になるのは、あまりに相談の待機数が多く、正確な数を把握しきれない状況だからだそうです。全国の児童相談所に寄せられる通告が1年で約10万件ということを考えると、虐待に限定しないとはいえケイさんに寄せられる相談件数は膨大です。

取材当日、まず相談件数の多さに触れると「なぜかわかりますか?」とケイさん。それには貧困の問題が関係しているそうです。例えば非公的機関などの場合は4千~1万円程度の相談料がかかることがほとんどで、中には4万円のケースも。公的機関の児童相談所に相談した場合でも、一時預かりや施設入所の必要が出てきた場合、親の収入などに応じて費用が発生します。「虐待などの問題を抱えている家庭は貧困家庭である

茅ケ崎にあるグッドファミリーパークは子どもや1人親家庭などが無料で参加できるイベント、近隣住民との交流会の開催など、多目的に活用している拠点のひとつ。ケイさん自筆の書も展示されている。

ケースが圧倒的に多いんです。電話代に事欠く親御さんも珍しくありません。お金が無いから誰にも相談できないということが無いよう無料で対応しています」。

虐待、いじめ、非行…あらゆる問題に無料で対応

現在ケイさんは、さまざまな問題を抱える人たちの相談に応じるグッドファミリーを主宰、そして虐待を受けた子どもたちの心身のケア、大人の心身の健康ケアや社会復帰などのプログラム提供などを行いサポートする一般社団法人「Homie(ホーミー)子ども未来育成会」の特別顧問として活動しています。この2つの法人を設立する以前は「Kei'sFamiliar(ケイズファミリア)」という屋号の相談事業を個人で行ってきました。その当時から一貫して無料で対応。神奈川以外の遠方からの相談にも自腹で交通費を負担して応じてきました。「先日は2つの家族の間で発生したトラブルの相談が来て、おかげ様で解決することができました。もちろんすべて無料です。最後は両家族を招いて和解をお祝いする食事会を開き、その費用も負担しましたから、有料だったのは自分だけです」と笑うケイさんですが、対応する件数のみならず資金的な面でも相当に厳しいことは間違いありません。しかしこれまでの活動において、公的な助成金を活用したことは皆無。有志からの寄付や自己資金だけで活動を行っています。

マリーナ=「ホーミーマリンクラブ」は、子どもたちの心を解放させる重要拠点。こちらも子どもや1人親家庭などに無料開放しており、イベントにも無料参加できる。一般客は有料で利用できるが、タトゥを見せるなど子どもたちが怖がることは厳しく制限されている。

育児放棄の果てに闇社会へ自らが抱える壮絶な過去

ケイさんご自身も幼少期に育児放棄されました。父親の顔は知らず、親戚をたらい回しされ、何年間も同じ服を着せられて育った幼少期から少年時代。やがて非行に走り、中学を出てからは暴走族からヤクザへ。その間鑑別所や刑務所を出入りし、最終的にはハワイでFBIに逮捕され、アメリカの刑務所、しかも凶悪犯ばかりが集められる刑務所に10年以上も収監されることになります。

アメリカの刑務所では人種ごとに徒党を組むギャングが対立し、殺人は日常茶飯事。そんな中で唯一の日本人だったケイさんは、ある

東京キララ社（東京・神田）からケイさんのこれまでの人生、現在の取り組みを紹介するたくさんの書籍が出版されている。
https://www.tokyokirara.com/

アメリカの刑務所に服役していた当時（左）

トラブルをきっかけに「チカーノ」と呼ばれる在米メキシコ系のギャングに仲間＝ホーミーとして迎えられます。

アメリカの世間一般では凶悪で知られるチカーノギャング。しかし彼らには多くの日本人が失いつつある側面、特に強力な家族愛があり、その家族愛はケイさんに対しても向けられます。また人種差別などを背景に多くのチカーノが貧困にあえいでおり、それが犯罪の温床になっていることなど、ケイさんにとっては自身の生い立ちと重ねあわせ、さまざまなことを再認識させられるような、彼らの生き方を目の当たりにします。

刑務所で日々を過ごしながら、ケイさんはカウンセリングの勉強を始めました。クリスマスシーズンに増える囚人の自殺を、少しでも止めたいと考えたからです。アメリカではクリスマスは外に出ず家族で過ごすことが慣例なので、とりわけ家族愛の強いチカーノたちの相談相手になることで自殺をくい止めたい、という動機がありました。

そうした毎日を過ごすうちに刑期は終了。ヤクザに戻る気持ちは無くなっていました。

真実は小説より奇なり。この一連のストーリーは、東京キララ社から発行されているケイさんの著書に詳しく紹介されています。ぜひ一読してください。

帰国後、ケイさんが真っ先に向かったのは警視庁。少年時代からお世話になった刑事に挨拶するためです。その刑事から2つのことを言われました。「これからは真面目に生きるのか、それとも悪の道に戻るのか。今、ここで決めていけ」「もし真面目に生きるなら、おまえにできる奉仕活動に取り組め」。自分にできる奉仕活動とはなにか。そう考えたケイさんは、非行少年・少女が立ち直る手伝いならできるかもしれないと考えてFamiliarのウェブサイトをオープン。個人規模ながら現在の活動につながる第一歩を踏み出します。

非行の更生活動で見えた現実への新たなアプローチ

親も手が付けられないほど荒れた子どもたちを自宅に引き取り、半年から長くて3年にも渡って共に生活しながら更生させる。それが最初に始めた活動です。

「そうして荒れた子どもたちをケアするうち、背景に親や家庭に原因や問題があることが見えてきたんです」とケイさん。「さまざま

な形の虐待、貧困…そういったことが、子どもが荒れる原因になっていました。ということは、親や家庭の問題までケアしなければ本当の解決にはなりません」。対象とする相談内容の幅はおのずと広がっていきました。

一方で、子どもや家庭のケア活動からは一切収入が得られないため、生活するための手段ももちろん必要です。当時、ケイさんと絆が深いチカーノのファッションやカルチャーが、若者を中心に流行していました。そこでケイさんはチカーノファッションのアパレルブランドとショップを設立。飲食店なども併設してビジネスを展開し、生計を立てると共に活動のための資金を捻出しています。そのほか子どもたちが無料でマリンスポーツを楽しめるマリーナ「ホーミー・マリンクラブ」、子どもたちを招いてイベントを開催する「グッドファミリーパーク」など、ケイさんや関係者の活動拠点となる施設も、支援者や仲間の後押しも得ながら少しずつ増えてきました。

数年前からは、薬物依存からの更生に取り組む知人が立ち上げたYOU TUBEチャンネルに、更生期間中の代役として出演しています。それによって知名度はさらに上がり、傍目には支援の声も多くなっているように見えます。しかし、ケイさんが活動を始めて20年。すべてが順調に進んだかというと、むしろ逆風が吹きつけているような状況が続いています。

ケイさんの活動を共に支えるホーミー子ども未来育成会の山内康浩副理事長（左）

偏見、誹謗中傷にも一切反論せず続ける活動

これまでケイさんは湘南地区で何度か拠点を変えてきました。さまざまなトラブルに見舞われた結果です。またYOU TUBEチャンネルに出始めてからは支持が増えた半面、いわれのない誹謗中傷も多くなりました。にもかかわらず相談が殺到し続け、頼る人たちが後を絶えないのは、ケイさんやスタッフの活動の誠実さの裏付けです。「ある事ない事言っている人は自然消滅しますから」と、まったく意に介しません。「ただメディアの取材はほとんどお断りしています。どうしてもアメリカの刑務所のことがフューチャーされ、そこで話題が止まってしまうんです。過去は変えようがありませんが、今やっている活動にとってマイナスになることもありますから。補助金を申請しないのも『子どもをダシに金をもらっている』という中傷を受けないためです。また最近はNPOを利用して悪事を働くケースも増えてきました。だからグッドファミリーとホーミー子ども未来育成会の一本化も検討しています」。

一方で、ボランティアとして近寄ってきた人が、ケイさんの名前を使って詐欺行為を働く被害にも、何度もあってきました。

そうした被害を防ぐこと、そして多くの依頼に迅速で確実に対応するためにも、ホーミー子ども未来育成会で募っているボランティ

アには厳密な審査も行っています。「私たちの活動って、表に出ていないもののほうが遥かに多いんです。子どものためのイベントなどは単発で手伝ってもらえるのですが、例えば長期に渡って支援などをしていくような仕事になると、やはり専門的な知識や経験がある人でないと務まらない場合もあります。そういう協力をしていただけるボランティアさんの育成は喫緊の課題の1つです」。

※イベント風景その他一部の写真は井上ケイ氏より借用しています

自分にできることを精一杯続けていくだけ

今後の展望について聞くと、ケイさんは「以前は子どもたちが入れる施設の設立を考えていたんですが、それはやめました。虐待された子どもたちは、大人の反応にとても敏感になります。施設の指導員たちも、やっぱり人間。生理的に合わない子どもには、態度のどこかに出てしまう可能性もあります。そこまで詳細に指導員を管理して責任を持つことは、自分にはできないと思い至り、施設は考えないことにしたんです。施設に入る必要が無いよう相談者の家庭を改善していくことに全精力をつぎ込んでいくだけです」と率直な思いを教えてくれました。

虐待だけでなく幅広い問題に対して、ケイさんはさまざまな形でアプローチしています。某テレビ番組の若いスタッフたちが、取材で見たいじめの現状を改善するため相談を寄せてくるなど、ケイさんはあらゆる人たちに頼られるだけでなく、共に第三者委員会を立ち上げていじめに対処しない学校を動かすなど、自らも動きながら活動する場面も多々あります。

そんなケイさんは取材中にふと物憂げな表情をみせます。「刑務所に慰問して受刑者の話を聞くと、若い薬物使用者が『親に打たれた』などという事例も珍しくありません。なにかが狂ってますよ。子どもたちが笑顔で暮らせる国を残してあげたい。そう願いつつ自分たちができることを続けていきます」

この世の裏側の最悪な場所を見てきたケイさんの口から出てきたこの言葉には、本当の重みがありました。

今号2022年度版「ふれあい」の製作中だった７月15日、当ノーマライゼーション住宅財団理事長土屋公三が永眠いたしました。改めて生前のご厚誼に深謝し、心より御礼申し上げます。

故人は平成元年（1989）10月に当財団を設立して以来ノーマライゼーションの理念に基づき、高齢者や障がい者が安全で安心して快適に暮らせる住生活環境の向上を通して、すべての人が生きがいをもって生活できる社会づくりと福祉の増進に寄与する事を願って止みませんでした。その意思を尊重し、私たち一同事業継続・発展に専心努力いたす所存でございます。

今後とも格別のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

公益財団法人　ノーマライゼーション住宅財団
事務局長　堀越良平

第32回
2022 福祉住宅建築助成実例集
ふれあい
公益財団法人
編集・発行　ノーマライゼーション住宅財団
〒060-0042　札幌市中央区大通西16丁目2-3　ルーブル16　９F
電話（011）613-7551　　FAX（011）612-8431
http://www.normalize.or.jp/
2022年8月発行

すべての人にやさしい住まいの環境を考える
Normalization Housing Foundation

2022年度

第34回 福祉住宅・福祉小規模集合住宅

バリアフリー建築助成

総額300万円

「すべての人が共に暮らし共に生きることがノーマル(正常)である」という
ノーマライゼーション理念に基づき、
高齢者や障がい者にとっても安全・安心で
快適に暮らせる住生活環境の整備・向上のため、
助成金により福祉住宅の建築を支援いたします。

助成の対象者

高齢者や障がい者が安心して暮らせる住宅、また将来身体機能が低下しても安心して生活できる住宅として新築やリフォームした建築主
※原則として2021年12月以降に工事が完了した物件

福祉住宅	新築(バリアフリーにした物件)やリフォーム(住宅内外の手すり・スロープ・トイレ・浴室等)の住宅改善・改修した建築主
福祉小規模集合住宅	グループホームや高齢者向けアパートなど(10名程度居住)の建築主

応募期間

2022年5月1日～11月30日(必着) 年1回公募

応募先

公益財団法人 ノーマライゼーション住宅財団
〒060-0042　札幌市中央区大通西16丁目2-3 ルーブル16 9F
TEL: 011-613-7551
FAX: 011-612-8431
E-mail:zaidan@tsuchita-grp.com
http://www.normalize.or.jp/

詳しくは
ウェブサイトを
ご覧ください→

主催 公益財団法人 ノーマライゼーション住宅財団

後援 北海道　社会福祉法人北海道社会福祉協議会
札幌市　社会福祉法人札幌市社会福祉協議会　北海道デザイン協議会

福祉住宅の実例、財団の活動に関しては

ノーマライゼーション住宅財団のホームページをご覧ください

http://www.normalizw.or.jp/